

## バックナンバーのご案内

過去の「雑司が谷旧宣教師館だより」は、公式ホームページからご覧いただけます。

右の二次元コードを読み取っていただくか、インターネットで「雑司が谷旧宣教師館だより」と検索してください。



## 雑司が谷旧宣教師館だより

第76号

2026年3月20日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032東京都豊島区雑司が谷1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081



### 旧宣教師館イベント報告3

#### 旧宣教師館のクリスマス

今年もクリスマスの季節がやってきました。皆さまに少しでも華やかな気分を味わっていただけるよう館内の飾付を行いました。正門ではクリスマスリースが皆さまをお迎えます。食堂には2メートル近い迫力満点のクリスマスツリーが登場。今年は趣向をこらし、ツリーの足元をプレゼントボックスや鮮やかなポインセチアで彩り、例年以上に華やかな仕上がりになりました。来館者からもとても好評で、冬限定の人気記念撮影スポットになっています。さらに1階奥の『赤い鳥』の部屋も大変身。クリスマスバルーンと大きなバナーを壁に飾り、部屋に入った瞬間、一気にクリスマス気分が盛り上がる空間となりました。この季節にしか味わうことのできない特別な旧宣教師館です。



#### 《クリスマスコンサート》

12月初旬、『立教学院諸聖徒礼拝堂ハンドベルクワイア』の皆さんによる「クリスマスコンサート」を開催しました。打楽器の一種のハンドベルは、一つのベルから出せる音は一音だけです。そのため大小さまざまなベルを組み合わせ、複数の奏者が協力して曲を奏でます。当日はメンバーによる息の合った演奏で、澄んだ鈴の音色が会場いっぱいに広がりました。



館内には多くの方が訪れ、心温まるひと時を楽しんでいただきました。来年も開催を予定していますので、ぜひ皆さまお越しください。

#### 《ナイトミュージアム》

開館時間を延長して開催したナイトミュージアムでは、クリスマスの特別な一夜をお楽しみいただきました。窓からこぼれるツリーの優しい灯りが冬の夜を温かく彩っていました。ギャラリートークでは、西欧に伝わる「アドベント・クランツ」という風習をご紹介します。「アドベント」とはキリストの降誕を待ちのぞむ期間のことで、クリスマスを迎えるために心を整える大切な期間とされています。「アドベント・クランツ」はドイツではじまった習慣で、11月30日にもっとも近い日曜日からはじまり、1週ごとに1本ずつローソクを増やしていきます。クリスマスまでに4本のローソクに火が灯され、それぞれに意味が込められています。1本目は希望、2本目は平和、3本目は喜び、そして4本目は愛。これからも「雑司が谷旧宣教師館」の魅力をさまざまな催しを通してお伝えしていきます。

(馬場 章)

### 旧宣教師館イベント報告1

#### オータムコンサート

—秋薫る美しいヴァイオリンとピアノの調べ—

10月26日(日)に秋の恒例・オータムコンサートを開催いたしました。

昭和初期に製作された、希少な西川ブランドの「ウエスタンピアノ」を中心に、これまでさまざまな楽器とのコラボレーション企画をお届けしてきました。今回はヴァイオリニスト・原実和子さんピアニスト・新明知美さんをお迎えし、ブラームスやラヴェルといった名曲の数々を披露していただきました。ヴァイオリンの奥深く時に激しく、また優しい旋律。そしてそれに寄り添うピアノの旋律。その見事な共演にご来場いただいたみなさまも感動されたことと思います。また演奏の合間には、原さんによるヴァイオリン奏法の解説もあり、楽器の魅力をより身近に感じられたひと時となりました。



文化財の建物の中で、とても印象に残る演奏会だったのではないのでしょうか。次回5月10日(日)にスプリングコンサートを開催します。ピアノとソプラノによる共演です。ぜひ楽しみにしていて下さい！

#### 『赤い鳥』と楽しむ、おはなし会

豊島区は児童文学ゆかりの地としても知られています。児童雑誌『赤い鳥』は、鈴木三重吉によって創刊され、小川未明や芥川龍之介らが童話を、北原白秋や野口雨情などが童謡を寄稿し、多くの文学者が関わりました。

秋に開催された「『赤い鳥』と楽しむ、おはなし会」では、『赤い鳥』1932年1月号に掲載された新美南吉の代表作「ごんぎつね」と、宮沢賢治の作品「注文の多い料理店」の一編「どんぐりと山猫」が紙芝居で行われました。二作品ともよく知られた人気のある紙芝居です。語り手の抑揚ある豊かな優しい語り口に、来場者はしだいに物語の世界に引き込まれていきました。まるで演劇を見ているかのような臨場感あるおはなし会となり、参加者に新鮮な感動を与えていました。



雑司が谷旧宣教師館ではこの他にもさまざまな催しをしています。

(馬場 章)

## 雑司ヶ谷鬼子母神と江戸文化

当館が所在する雑司ヶ谷地域では、江戸時代から、雑司ヶ谷鬼子母神堂が子育て・安産にご利益があるとして信仰を集めてきました。

美人画で有名な浮世絵師・喜多川歌麿は『絵本吾妻遊』の中で、風車を携えて雑司ヶ谷鬼子母神を参詣する人々を描きました(図1)。本書は、版元・蔦屋重三郎から出版された、江戸やその付近の名所に狂歌(ユーモラスな短歌)を添えて、面白おかしく紹介した本です。



図1 『絵本吾妻遊』寛政2(1790)年  
奇々羅金鶏作 喜多川歌麿画 蔦屋重三郎版 法政大学江戸東京研究センター所蔵

風車を手に、楽しげな足取りで歩く人々の上には、

「風車 かふてかへさの 酒きけん しだい  
しだいに 酔やまはらん」

と撰者の奇々羅金鶏による狂歌が添えられています。現代語訳すれば、

「(雑司ヶ谷鬼子母神で)風車を買った帰りに酒を飲めば、だんだん(風車のように)酔いも回ってくるだろうよ」

となり、当時の雑司ヶ谷地域は遊興地(ゆうきょうち)でもあったことが伺えます。狂歌特有の、信仰の地に参詣したはずが、酒という俗っぽさにまみれてしまう人の性への皮肉が伺える一首です。

『絵本吾妻遊』から約50年後に裕福な町人の斎藤月岑によって著された『江戸名所図会』より「麦藁細工の角兵衛獅子」(図2)には、雑司ヶ谷鬼子母神にゆかりのある、五色の風車、角兵衛獅子、すすきみみずくという郷土玩具がそれぞれ描かれています。僧侶のほかに描かれているのは女性と子どもたちで、門前町にて庶民が手作りする、いわば細工物としての郷土玩具が、参拝者の需要のもとに成立していたことが読み取れます。五色の風車は雑司ヶ谷のアイコンとして、上述した『絵本吾妻遊』にも登場しました。また、角兵衛獅子は同名の芸能を表した人形で、獅子舞のような頭が特徴です。そして、すすきみみずくは、鬼子母神のお告げに従い、母を助けるために少女が制作して売り出したという昔話がいわれとして残る、現代でも親しまれる雑司ヶ谷名物です。



図2 『江戸名所図会』より「麦藁細工の角兵衛獅子」  
天保5~7(1834~36)年 斎藤月岑編 長谷川雪旦画 国立国会図書館所蔵

同書の「雑司ヶ谷の会式」(図3)には、雑司ヶ谷鬼子母神で毎年10月13日の日蓮上人の忌日に合わせて行われた「御会式」の賑やかさが見て取れます。本文中の『稲麻の如し』という表現は、多くのものが入り乱れていることを意味します。実際、風車を持っている男性がいたり、ところ狭しと人の姿が描かれていたり、江戸時代の活気に満ちた喧騒が聞こえてくるようです、向かって左側のページには、

まつおばししょう  
松尾芭蕉の俳句

「菊鶏頭 伐つくしけり 御命講(御命講は御会式の別名)

が書かれています。意味は

「御会式で供えるために、キクやケイトウの花をすっかり刈り尽くしてしまったなあ」となります。本図で描かれる盛大な御会式のようなすは、時代の隔たる松尾芭蕉の句によって端的に表されています。

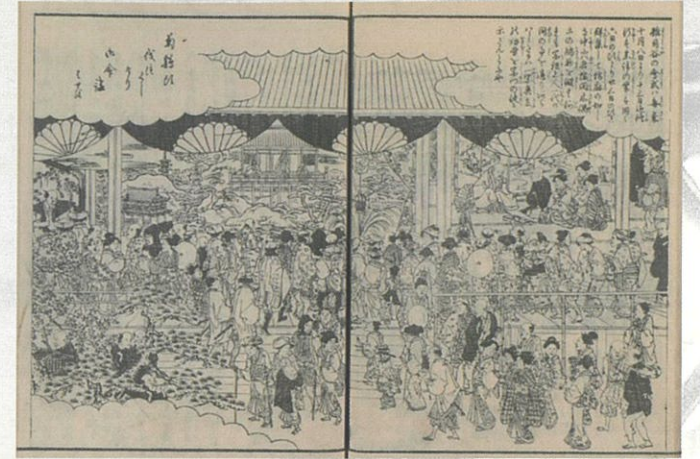


図3 『江戸名所図会』より「雑司ヶ谷の会式」天保5~7(1834~36)年 斎藤月岑編 長谷川雪旦画 国立国会図書館所蔵

以上の3図は、それぞれ別の角度から雑司ヶ谷鬼子母神を描いていますが、すべて

町人、庶民が主役となっているという共通点があります。現在では10月16~18日に開催される御会式の日、すっかり閑静な住宅街となった雑司ヶ谷地域一帯が熱気に包まれます。2・3日目の夜に行われる「万灯練供養」では、高さ3~4メートルの万灯を掲げ、人々が太鼓を叩きながら練り歩きます。このように、雑司ヶ谷の地域文化は、市井(しせい)の人々の手によって、脈々と受け継がれているのです。

※正しくは、鬼子母神の「鬼」には1画目の点(ツノ)のない文字を用います。

(今野 美怜)

## 旧宣教師館イベント報告2

### 秋の新規事業・サンクスギビングデコレーション

11月18日(火)~11月30日(日)にかけて、サンクスギビングデーのデコレーションを実施し、野菜や穀物のレプリカを食堂に飾り、秋の宣教師館や雑司ヶ谷の歴史についての解説パネルを設置しました。

サンクスギビングデーは、当館に居住していたマッカーレブの故郷・アメリカをはじめとする国々では、収穫と神の恵みに感謝する意味合いを持つ年中行事です。現代でも盛大に祝われており、ターキーやパンプキンパイなど、ご馳走を囲んで親しい人との時間を過ごします。マッカーレブ自身がサンクスギビングデーを祝った記録は発見されていませんが、厳格なキリスト教精神を持ち、自給自足の生活を営んでいたことから、収穫に感謝する気持ちを忘れなかったのではないのでしょうか。

また、11月22日(土)には開館時間を18時まで延長する、ナイトミュージアムを開催しました。17時からギャラリートークを実施し、秋の夜長に輝く当館を多くの来館者の皆さまに感じてもらう機会になりました。

ナイトミュージアムは2026年度も開催予定です。通常開館とはひと味違う宣教師館をお楽しみください。

(今野 美怜)

